



ハル子ちゃんのおにぎり

「埼玉県」久保 百香 56歳

おにぎりは三角形と決めている。

35年以上も前の話である。看護学校を卒業し、初めて配属されたのは小児病棟だった。可愛い子どもたち相手なら毎日楽しく仕事ができるだろうと希望した部署だったが、新人ナースの日々はそんな甘いものではなかった。覚えることが山のようにある上、子どもたちはすぐに嫌々をするし、泣き叫ぶし、思ったように動いてくれない。そんな患児とどう接していくか分からず、辞めようと思ったこともあった。痛い検査や治療で、本当に辛いのは子どもたちのほうだったのに。

その日、私はハル子ちゃんの担当だった。2歳で小児がんを発症

し、今回何度目かの抗がん剤治療で入院していた。顔見知りの先輩ナースや先生たちとは打ち解けていたが、新入りの私にはなかなか懐いてくれなかった。

お昼の時間になり、私は抗がん剤の副作用で食欲のないハル子ちゃんに少しでも食べてもらおうと、いろいろ努力してみたが、横を向かれてしまった。どうしていいのかわからず、諦めて下膳しようとした時、「かんごふさん、おにぎりつくれる?」「さんかくだよ」と、小さな声でハル子ちゃんが私に話し掛けてきた。「ごめんね。かんごふさん、三角おにぎり作れないんだ」。

情けない気持ちで正直に話すと、「じゃあ、おしえてあげるね」と、

ハル子ちゃんはそう言ってくれた。「ふたつの手をおやまのかたちにして、その手でごはんをにぎったら、お手々の中でクルツてまわすの」

小さい手で一生懸命教えてくれるハル子ちゃんに感動しながら、私は精一杯おにぎりを握った。人生初の三角おにぎりは、少しゆがんでいたが、「かんごふさん、じょうずにできたね」。

ハル子ちゃんは、天使のような微笑みでそう褒めてくれた。

あの日から、くじけそうになった時あの光景を思い出す。そして、ときどきハル子ちゃんにこう話し掛ける。

「ハル子ちゃん、もう一かいさんかくおにぎりのつくりかた、おしえてほしいな」